

読者へ

花も実もある中年人生

下水道局 安藤 克己

まだ若いと思っているうちに四十代の半ばを迎えた。本市職員になりたてのところ、ハマの石原裕次郎といわれたのも今は昔、人生九十年の高齢化社会にあっても折り返し点である。家族は妻に子供が一人、現代の標準的な家庭だと思う。

大勢の兄弟のなかで育った自分自身の子供のころに比べて、昨今一人っ子の家庭が多くなつたような気がする。この傾向が続くと、二十一世紀には単純計算一組の夫婦から子供一人で、日本の人口は半分になってしまう。本市の人口も長寿や社会増を計算に入れないと、二十

年前の一五〇万都市に逆戻りしてしまふ。それも、今の若者の老人で満ちあふれた一五〇万都市になってしまう。

子供をどんどん産めば、ことは解決するのかもしれない、グローバルな視野で考えるところもいかなうと思う。

高度経済成長期に、多くの若い人が本市へ転入し、ベッドタウン化した。そして、これらの人が次々に結婚し、家庭をもち、横浜を第二の故郷とし、これから高齢期を迎えようとしている。

婦人の社会進出の増加とあいまって、老人問題は今後ますます重要になってくると思われ。老人の役割として、例えば、共働き世帯での留守番があると思う。しかし老人が病気で倒れ、介護を要する状態になったとき一体誰が介護するのか。今後このようなケースは増加すると思われ。

家族・地域社会と行政の役割分担について明確化していく必要がある。そして私自身も、一市民・一職員として「自我作古」のチャレンジ精神でこれからの

頑張ろうと思う。

「名刺考」

民生局 根本 久

私の仕事は、企業や団体等との接触が多く、名刺交換をする機会が多い。その機会が多くなれば、継続して接触している人

だけではなく、一度だけという人の名刺も増え、単にホルダーに入れっぱなしということも多くなる。こんな経験をしたことがある。先方から名指しで電話をもらい、どうやら相手は私を知っている様子だがこちらは全く記憶がない。何とか話のつじつまを合わせその場をしのいだが、冷汗ものであった。その逆だつてあるに違いない。当り前だといえはその通りだが、交換した名刺の自分にとっての意味合いと相手のとが異なる場合があることもある。

ところで、人との接触の機会が増えると名刺交換も一種の儀式化し習慣になってしまい、渡す方も、もらう方も、きまりぐらゐに考えがちである。名刺は肩書き社会の悪しき弊害かもしれ

れない。とはいっても、名刺を頼りに仕事をするようになってみてつくづく整理の必要性を痛感しているが、案外やっかいなもので、特に一日に何人もの人に会ったときなど、ついつい放りっぱなしになりがちである。整理は後回しなんてこともしばしばである。だから最低限、もつた名刺には余白に日付、場所を記し、少しでも記憶に残すよう心掛けている。

もとより人と知己を得ることは仕事上のみならず、人生においても宝である。このことは相手にとっても同様である。名刺

△あとがき▽

読みやすく、直接職務に関係のない人にも親しめるように。市民・学者・市職員の自由闊達な議論のなかから、将来を展望する新たな発想や提言が出てくるように。こうしたことを念頭に、来たるべき高齢市民社会を背景にした「活力ある福祉社会」実現の方策について企画した。「自分の老後や病気のこゝろ」は横浜市民意識調査(当室)でも心配ごとの第一位で、市民の最

は自分の分身みたいなものであり交換された後は一人歩きだつてする。まして、市の職員としての仕事上の名刺はなおさらかもしれない。だからこそ、せめて渡した名刺には責任を持つていこうと思う昨今である。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで(電話六七一一〇二九)。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

大の関心事である。

ある経済学者がいうように、三〇年、四〇年後に自分が使う水、電気、トイレットペーパーなど何から何まで備蓄できればそれにこしたことはない。それでも後生に負担をかけずに生きるのには難しい。では、どうすれば「バラ色の未来」が訪れるのか。シビル・オブティマム(最適基準)の達成に向けて、三〇〇万市民の英知を結集すべきときかと思われる。△下嶋▽